5 斜面地を涵養するハイウェイサイドタウン

～斜面に自然を取り戻す～

笹谷 康之
SASATANI Yasuyuki
立命館大学／理工学部／准教授

改変された斜面を自然斜面と同等の価値を持つ斜面に戻すのは難しい。土砂災害履歴を持つ斜面を開発した住宅地において、周辺の植生を誘導、手を加えて復元することで自然度の高い斜面へと移行できる。荒れた土地をなだめすかし、記憶を後世につなぐまちづくりは類似する町の参考となろう。

土砂災害の歴史

筆者が住む滋賀県湖南市のハイウェイサイドタウンは、江戸期の菩提寺村の北部である。村名の由来は、良弁（ろうべん）が731年に開基した円満山少菩提寺にある。甲賀の杣（そま）が置かれたこのあたりは、奈良時代は杉や檜の大木が茂っており、これが平城京の造営や少菩提寺等の寺院の建築に用いられた。少菩提寺は、最盛期には37坊を数えたが、幾度かの焼失と再建を経て、周辺の山林は徐々に荒廃していった。そして1570年に、織田信長と戦った六角の敗残兵によって、伽藍のすべてを焼かれて廃寺となった。

寺はなくなっても集落は続き、菩提寺村内に5小村が残った。その後も山林の収奪が続き、花崗岩質の禿山が顕著となり、ついに1765年に大規模な土石流が発生して北部は完全に埋もれてしまい、生き残った人々は南部に移った。『滋賀県の砂防』によれば、「現大山川の大砂漠地に八王子神社八ヶ堂宇（どうう）、菩提寺外二十数個の寺院及び三十数有余戸の八王子村なる部落ありしも、背後の山岳崩壊して漸次部落を埋没し、幾多人畜の害を及ぼし村民其の居に安んぜず。遂に現今の大字菩提寺村に移住せり」と記されている。東から西に流れる大山川の河原は、通称は菩提寺磧（ぼだいじがわら）、字は広野と呼ばれ、幅員300mにも達した。基礎工事の杭打ちからも土石流が10m以上堆積したことがわかる。今日でも、旧河道の一部の土地は、集中豪雨で頻繁に冠水し、重量車が通ると振動が激しい。

ハイウェイサイドタウンの「つつじ通り」沿い

近代砂防

禿山に土砂災害、水害が続く状況で、菩提寺戸長（こちょう）の龍池藤兵衛は、1880年に滋賀県斧磨（よきとぎ）村の西川作平から緑化に効果があるヒメヤシャブシを教えられた。そして、1883年にヒメヤシャブシの播種育苗（はしゅいくびょう）の方法を確立し、田畑を利用して大量生産を始めた。ヒメヤシャブシは、根に共生する放線菌によって空中窒素を固定する樹木であり、通称ハゲシバリと呼ばれた。禿山の山腹砂防として、階段状の犬走りと呼ぶ平場を造り、そこに藁や草木灰を敷き詰めて、マツとともにヒメヤシャブシの苗を植栽した。それは1日2本、ツルハシの先が壊れたとさえ伝えられる難工事であった。

八重谷の砂防工事1年後（滋賀県（1907-1935）『滋賀県林相写真帖』より）

八重谷の現況

県営砂防の予算もつき、1888年には内務省直轄の菩提寺工営所が置かれ、県費2/3、国費1/3、苗木費には私有地は民費、国有地は農商務省予算が充当された。さらに渓流砂防として、田上山（たなかみやま）のオランダ堰堤の設計で有名な初代菩提寺工営所長の田辺義三郎が設計した石積の大山川堰堤も造られた。

旧大山川堰堤

ヒメヤシャブシの育苗は、その後、年間数100万本を朝鮮・台湾も含む全国に出荷する一大産業に育った。菩提寺の砂防は戦後まで続いた。そして、真砂土の痩せた酸性土壌に強い、アカマツとコバノミツバツツジが群生し、4月には山を紅紫に染めるようになったのである。

菩提寺磧とその周りの山は、戦時中は陸軍実弾射撃演習場に利用された。戦後は『大菩薩峠』『日輪太郎』等の時代劇映画のロケ地として、櫓等のセットが造られた。

ハイウェイサイドタウンの開発

日本最初の高速国道である名神高速は、栗東IC～尼崎IC間が1963年、菩提寺を通る関ヶ原IC～栗東ICが1964年に開通した。

ハイウェイサイドタウンは、1966年から名神高速の北側に、プールやテニスコートを設置した別荘地として開発された。当時の販促パンフレットには「岩山をバックにした高級別荘向き住宅地…山腹は天然の岩組庭園となり岩間から湧き出す清水は渓流や滝となって岩の間を走り、夏は河鹿の鳴く別天地…春はツツジの花盛り、夏は総て山緑に囲まれ、秋は光陽の彩美しく、冬の雪景色も又格別で、四季夫々の風物面白く、都会の激務のお疲れをほぐす最適地」とある。住宅地としても「…近年の自動車と高速道路の出現によって、ハイウェイサイドが新しい住宅地として脚光をあび…」と宣伝されて、自動車つきの販売まであった。ここは、北東の笹尾ヶ岳と北西の天山（あまやま）に囲まれ、南に名神高速や大山川が開け、三角点のある天山からは住宅地や名神高速とともに四方に滋賀の高峰ベスト5座が遠望できる。

1960年代後半のことだから、ダイナマイトで発破して

現地の岩を多用した石積擁壁

造成し、顧客の要望にも応えて道路の位置を変更し、敷地を切り売りした。別荘地仕様の道路幅員は広く、西側の斜面地では不正形に道幅を広げることが多い。こういった経緯もあって、斜面地は最大18%勾配の急坂で複雑な道路パターンになっている。

この造成地の石積は京都の造園業者が請け負い、一部は天山の石切場から切り出された間知石を使っているが、多くは野面石積である。角には大石を据え、丸石の平らな面を綺麗に揃えたり、少し凸凹した石で設えたり、間知石で組んだりと、敷地に合わせて石組の姿が異なる。石はエイジングが効く生きものだから、人工物の劣化と異なり錆がまた味わい深い。

過去に土砂災害を経験した土地なので、2013年には26カ所が土石流とがけ崩れの土砂災害防止警戒区域に指定された。そして、山腹に土留めネットや落石防止フェンスが造られ、2020年には避難所に指定されている菩提寺北小学校（1995年開校）の通学路横の渓流で、砂防堰堤の工事が始まった。

自生種のコバノミツバツツジ

ハイウェイサイドタウンは、一斉に入居した住宅団地ではないので、住民の年齢構成が比較的ばらついている。ここ40年間は毎年おおむね10名の子どもが生まれ、5世帯が転出し、主に子育て中の20世帯が転入して、小学校1学年が20数名で安定している。5軒の中古家屋が再利用され、15軒の新築が建つ計算だ。利用されない別荘や古家が薮に覆われている敷地もあれば、コンクリートの直の擁壁で平場を最大限確保した新しい建売もある。

残念ながら、東側の元々平場だった別荘の敷地が細分化されてきた。せっかく自生している樹木も伐採されて、完全な更地にして緑の少ない住宅も増えた。

筆者の宅地には、隣家との擁壁や庭に組まれた土留めや階段の石とともに、造成されていない地山の庭に1m以上の岩が30ほど散在する。そこに、前住者や家族が植えた花木・果樹の他に、100株以上のコバノミツバツツジをはじめ、モチツツジ、アセビ、ネジキ、ガンピ、タラノキ、マンリョウ、クロモジ等50種ほどの樹木が自生する。

コバノミツバツツジが咲き誇る天山からの眺望

石と自生樹木を取り込んだ庭

歌い継がれる合唱組曲『広野物語』

コバノミツバツツジは万葉集に歌われて、サクラとともに咲き始める早咲きツツジで、いわゆるお爺さんが山に柴刈にいく、柴の主材料である。1mほどの高さで刈って、周りの下草も刈れば、勢いよく萌芽して山を紅紫に染め、2～3年後にはまた良い柴が得られる。歴史的に見ると、高貴な人々にとって花はサクラを指したが、今日のようにどこにでもサクラが植えられることもないので、圧倒的に多い自生のコバノミツバツツジを愛で、そこにサクラが自生する場合があるのが、東海から九州北部にかけての花見であった。「春の野遊び（4月8日）」「旧暦の雛祭（4月3日）」「ツツジ狩り」等とも呼ばれて、親戚一同や、地域によっては子どもだけが花見に集まって弁当を食べて遊んだ。この花見の中で、鶯の声を聞き、山野草を愛で、里山の斜面地でくつろぎながら、人々はその地の適切な管理も練ってきたのである。

筆者らは2013年から、菩提寺北小学校の児童らとともに、コバノミツバツツジを、種から育てて自生していない法面に植樹し、自生地を保全する活動を続けている。コバノミツバツツジが群生する眺望に優れた天山の登山路も整備している。

別荘地仕様で造られたハイウェイサイドタウンでは、斜面の庭や擁壁に裏山とつながる自生のコバノミツバツツジがよく似合う。

斜面地の履歴の継承

筆者は、このコバノミツバツツジと40種以上ある類縁のミツバツツジ類を求めて、毎年春には数10日の旅をして写真を撮り、各地のツツジ愛好家と交流している。適度に人の手が入って生態的な攪乱があり、多様に彩る自生種の姿を見るのが楽しみだ。社寺、個人の山主、公園管理者、自然保護団体と、コバノミツバツツジに魅せられた人々の保全愛護活動は、ハイウェイサイドタウンの履歴同様に豊かな物語を生みながら、それぞれ固有の多彩な風景を奏でている。道中、高速道路法面のコバノミツバツツジを見るのも楽しみだ。

一方、同じ道中でも土地の文脈から切り離されて、所有者の敷地内だけに削り込まれた法面が、哀れにも郊外や田舎の豊かな景観を切り裂いているのを見かける。土地所有権が強く、水・緑・景観をつなぐ環境権が疎かで、そのくせ登記されず放置された全国の土地が、九州の面積を超えているのが日本の惨状だ。人口が減少する中で、土地の不用意な造成を少なくするとともに、切盛によって生じた斜面を、長い目で見て地産の石や植物で設える工夫がほしい。

2人の娘が入学した菩提寺北小学校では、開校3年目から合唱組曲『広野物語』が歌い継がれている。「…名前は 菩提寺 その名はそのまま 村の名になったとさ … 洪水だ 山が動く 山津波 うもれてしもうた … 高速道路が 横たわる … 歴史の悲しみ 乗り越えて 郷土の思い 込められた … 今 今 宝の地 祈りの地 幸せのこの地 幾度の辛さ 乗り越えて 心を一つに この喜びを … うつくしいものとの 出会いと 今 生きていることの すばらしさ そして今 集うこの喜びよ ありがとう … この時代を残してくれた ありがとう …」と、成長した娘たちは、今でも旧友と会えば口ずさんでいる。この曲は「斜面に自然を取り戻す」ことを、正に謳っている。

娘を含む出身者が、土地の履歴を伝える『広野物語』と、この地の原風景を心に刻みながら、より居心地のよい斜面地へと育ててほしいと祈っている。

<参考文献>
1）滋賀県（1920）『滋賀県の砂防』滋賀県
2）横田秀雄編（1998）『サイドタウンの歩み』ハイウェイサイドタウン自治会
3）儀平塾編（2011）『鈴木儀平の菩提寺歴史散歩』サンライズ出版